

大学のカリキュラムを生かした
自然体験活動指導者養成プログラムの開発に関する研究

Study on Construction of the Outdoor Instructor Training Program,
Utilized by the Curriculum of the University

青 木 康 太 朗 粥 川 道 子
Kotaro AOKI Michiko KAYUKAWA

北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報 第5号 2014

Bulletin of the Northern Regions Lifelong Sports Research Center Hokusho University Vol. 5

大学のカリキュラムを生かした自然体験活動指導者養成プログラムの開発に関する研究

Study on Construction of the Outdoor Instructor Training Program, Utilized by the Curriculum of the University

青木 康太朗¹⁾ 粥川 道子¹⁾

Kotaro AOKI Michiko KAYUKAWA

キーワード：自然体験指導者養成，大学カリキュラム，研修効果

I. はじめに

「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)」(平成8年7月)において、生きる力の育成方策のひとつとして体験活動の重要性が指摘されて以来、青少年の体験活動を推進する社会的な仕組みづくりが求められている。このような仕組みを作るためには、体験活動に係るプログラム開発や指導者養成などのソフト面から施設・設備の充実といったハード面に至るまで取り組むべき課題は多岐に及んでいる。とりわけ体験活動を推進する指導者の養成・確保は急務な課題と言える。

平成8年7月の「青少年の野外教育の充実について(報告)」では、青少年の野外教育の充実方策のひとつとして野外教育指導者の養成・確保の重要性が指摘され、専門的な指導者養成システムの構築、教員や教員養成課程の大学生に対する指導者養成事業の充実等について提言がなされた。以後、様々な答申等において、大学や青少年団体等における指導者養成の充実^{1) 2)}、教員養成における自然体験活動や野外活動に関する講義・実習の導入^{3) 4)}等が求められるようになった。

現在、野外教育や体験活動に係る専門コースを設置している大学は、筑波大学体育専門学群の野外運動研究室、信州大学教育学部の野外教育コース、びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部の野外スポーツコース、北海道教育大学岩見沢校のアウトドア・ライフ専攻、日本体育大学体育学部のアウトドアスポーツ専攻といった一部の教育系・体育系の学部に限られており、その数は未だ少ない。その理由として、筆者らは、野外教育や体験活動に係る仕事の社会的な認知度の低さ、卒業後の就職先の少なさ、身分や収入の不安定さなど、この業界が職業として十分

に成熟していない点が挙げられると考えている。アメリカなどでは、大学や大学院で野外活動や野外教育、環境教育等を専門に学んだ学生は各地の国立公園や野外教育センターにディレクターや専門職員として就職する道が開けていると言われている⁵⁾。我が国でも、NPO法人制度や指定管理者制度が導入されたことにより野外教育等に関する専門的な知識や技術を生かせる仕事が徐々に増えてきているが^{6) 7)}、安定した収入が得られる職は未だ限られており、専門性を生かした職に就いても嘱託職員など期間が限られている場合も少なくない。また、雇用情勢が厳しい昨今、大学には新卒学生の就職率の向上や卒業後の職業生活等への移行支援といった幅広い職業人養成が求められていることから、このような就職に繋がりにくい限られた分野を専門コースとして設置し、維持していくことは容易なことではない。

大学教育の一環として指導者養成を行うメリットは、長期間にわたって専門的な養成に取り組める点であり、さらに専門コースの設置によって体系的かつ高度な指導を行うことで質の高い指導者を育成できる点にある。このことから、大学教育で野外教育等の指導者養成を行うことは、青少年の体験活動を推進する社会的な仕組みづくりにおいて重要な役割を果たすことは言うまでもない。しかし、既に述べたとおり、昨今の大学教育の在り方を鑑みると、野外教育や体験活動に係る専門コースを充実させていくことは当面難しいと予想されるため、専門コースを設置しなくても質の高い指導者が養成できる新たな方法を模索していかなくてはならない。

筆者らが所属する北翔大学(以下、「本学」という。)も、平成18年度よりアウトドア・マネジメントコースを設置し、北海道の地域性を生かした自然体験活動指導者養成に取り組んできたが、当該コースを選択する履修生

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

の少なさ等の課題もあって、平成20年度の大学機構の改組に合わせてアウトドア・マネジメントコースを廃止し、野外教育関連科目のスリム化を図った経緯がある。しかし、野外教育関連科目の削減に伴って一部の野外教育関連科目を学科や教職課程の必修科目に位置付け、できるだけ多くの学生が野外教育等に触れる機会を設けたことで、野外教育関連科目を履修する学生が飛躍的に増える結果となった⁸⁾。そのため、今後は、野外教育に興味を持った学生をいかにして質の高い指導者へと育てていくのが課題となった。そこで筆者らは、平成22年度より大学のカリキュラムを生かした自然体験活動指導者養成プログラムの開発に取り組み⁹⁾、平成23年度からは私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「北海道型スポーツ振興システムの構築」(平成23年～平成25年、北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター)の研究活動の一環として養成プログラムの実践とその成果の検証^{10) 11)}を行ってきた。

本研究は、筆者らが取り組んできた大学のカリキュラムを生かした自然体験活動指導者養成プログラムを実践事例として紹介するとともに、開発した養成プログラムを評価することで、今後の大学教育における指導者養成の充実の在り方について検討することを目的とした。

II. 大学のカリキュラムを生かした自然体験活動指導者養成プログラムの開発

大学のカリキュラムを生かした自然体験活動指導者養成プログラム(以下、「養成プログラム」という。)の概

要は、図1に示したとおりである。養成プログラムの策定に当たっては、まず養成プログラムの骨子となる野外教育関連科目(表1)のねらいや内容を精査し、それぞれの位置づけを明確にした上で体系的・段階的に組み合わせ、3年でステップアップする流れを作った。1年目は大学のカリキュラムを主に自然体験活動を行うために必要な知識と技術を習得する「基礎的」な段階とし、2年目以降は課外活動や自主活動を取り入れながら自然体験活動指導者に求められる「専門的」な知識と技術を習得する段階とした。

III. 大学のカリキュラムを生かした自然体験活動指導者養成プログラムの実践

1. 自然体験活動を行うために必要な知識と技術を習得する基礎的な段階

養成プログラム1年目は、野外関連科目の履修が始まる2年次の学生を対象としており、野外教育実習(写真1)や雪上活動実習(写真2)、レクリエーション実技、野外教育論、野外レクリエーション指導論を通じて理論と実践の両側面から自然体験活動を行うために必要な知識と技術を習得する基礎的な段階としている。ただ、ここでは指導者養成というよりは様々な体験を通じて野外教育の意義や価値を学び、興味を持ってもらうことに重点を置いており、専門的な知識や技術をもっと学びたいという気持ちを醸成させ、指導者への興味を芽生えさせることをねらいとしている。このように養成プログラム1年目に野外教育関連科目の大半を配置し、学生が野外

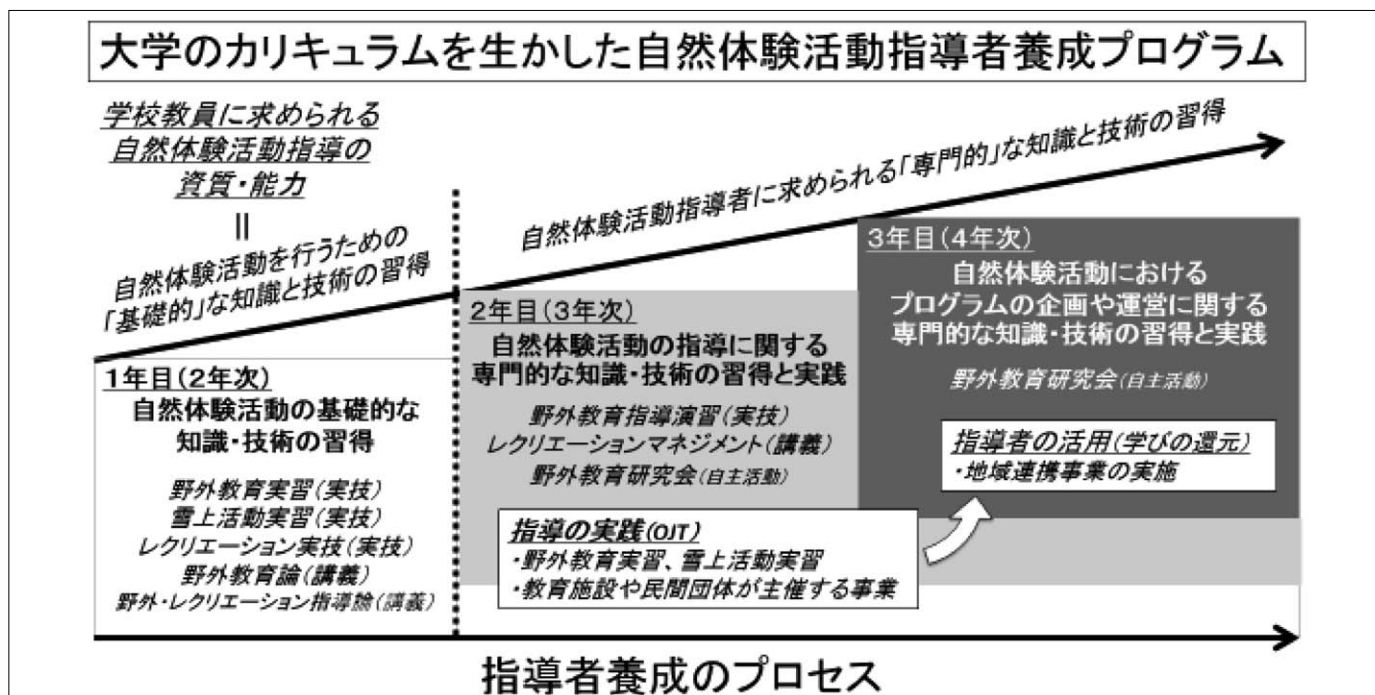


図1 大学のカリキュラムを生かした自然体験活動指導者養成プログラムのモデル図

表1 野外教育関連科目のねらいや内容

科目名	ねらい	主な内容
野外教育実習 (実技) 【2年次前期】 教職必修科目	野外教育や組織キャンプに関する基礎的な理論を学ぶとともに、3泊4日の組織キャンプを実際に体験し、野外教育への知識と理解を深める。	講義・現代社会の課題と野外教育の役割 ・学校教育における自然体験活動の現状と課題 ・個人装備の基礎知識とパッキングの基礎技術 ・服装の基礎知識とレイヤードの基礎技術 ・安全管理とファーストエイド 実習・野外レクリエーション(イニシアティブゲーム、登山等) ・野外生活技術(テント設営、火おこし、野外料理等) ・体験学習法(ふりかえり、マインドクロッキー等) ・環境教育(キャンプサイトクリーンアップ)
雪上活動実習 (実技) 【2年次後期】 選択科目	冬季に行われる自然体験活動として雪上活動のスキルを習得するとともに、雪上活動における安全管理やリスクマネジメントについて学習する。	講義・雪上活動の基礎 ・雪上活動における装備 ・雪上活動における安全管理 実習・雪上レクリエーション(雪遊び、スノーシュー、ネイチャースキー等) ・安全管理(埋没体験、ビーコン搜索体験) ・環境教育(冬の森林観察) ・雪の創作活動(イグルー、雪像、スノーシアター等)
レクリエーション 実技(実技) 【2年次前期】 選択科目	仲間と協力して指導法を相互に学習し、レクリエーション支援の基礎技術を習得する。	講義・レクリエーションの意義とレクリエーション指導者の役割 実技・ニュースポーツ ・野外レクリエーション ・コミュニケーションゲーム
野外教育論 (講義) 【2年次前期】 学科必修科目	野外教育ならびに組織キャンプに関する基礎的な理論について学び、生涯学習社会における野外教育の指導者としての知識と理解を深める。	・現代社会における野外教育の現状と課題 ・組織キャンプの定義と歴史 ・組織キャンプの指導者の役割と資質 ・キャンプカウンセリング ・キャンプの企画と運営、評価、記録 ・野外教育における安全管理と安全教育
野外・レクリエーション指導論 (講義) 【2年次後期】 選択科目	指導者(教育者)としての視点から、野外・レクリエーションに関する理論や実践について学習する。	・野外レクリエーションの意義 ・指導者に求められる資質と能力 ・ライフステージや特性に応じた指導法 ・野外レクリエーションのプログラムデザイン ・野外・レクリエーションのプログラム事例 ・安全管理とリスクマネジメント
野外教育指導演習 (実技) 【3年次前期】 選択科目	野外教育実習の企画・運営・評価を通じて組織キャンプの在り方を学び、野外教育指導者としての知識と技術を深める。	講義・組織キャンプの理論と実際 ・キャンプマネジメント ・組織キャンプにおける安全管理 実技・組織キャンプの企画と評価 ・組織キャンプの準備とフィールド調査 ・各活動の指導に関する事前トレーニング ・野外教育実習での指導(グループカウンセラー、プログラムスタッフ等)
レクリエーション マネジメント (講義) 【3年次後期】 コース必修科目	レクリエーションマネジメントの理論や方法論を座学で学習するだけでなく、レクリエーションイベントに参加し、イベントの組織管理や運営手法等について学習する。	・レクリエーションマネジメントの理論と実際 ・ライフスタイルとレクリエーション ・高齢社会の課題とレクリエーション ・少子化の課題とレクリエーション ・レクリエーションイベントのプログラムデザイン ・レクリエーションイベントの運営



写真1 野外教育実習 (ASE)



写真2 雪上活動実習 (スノーシュー)

教育等に触れる機会をできるだけ多くすることで、次の段階につながるよう工夫している。

なお、この段階は、学校教員に求められる自然体験活動指導の資質・能力を育成する段階としても位置付けている。平成20年に告示された学習指導要領で体験活動の充実が示されたことで、今後は、教員自身が体験活動の意義や重要性を理解し、その基礎的な指導技術を身につ

けておくことが求められている。教員を目指す学生自身の体験不足が指摘される昨今の状況を鑑みると、教員養成の段階で自然体験活動に関する基礎的な知識や技術を身につける機会を設けることは非常に意義があると言える。そのため、本学では野外教育実習を教員養成課程の必修科目に位置付け、教育現場で体験活動の指導ができる実践力のある教員の育成を行っている。

表2 野外教育実習・雪上活動実習における実習生及びスタッフ数

年度	実習形態	実習生 (2年次)			計
		1年目	2年目	3年目	
平成23年度 (施行年度)	野外教育実習	151 (117/34)	13 (8/5)	5 (2/3)	169 (127/42)
	雪上活動実習	64 (55/9)	14 (9/5)	5 (2/3)	83 (66/17)
平成24年度 (開始1年目)	野外教育実習	127 (87/40)	16 (10/6)	7 (3/4)	150 (100/50)
	雪上活動実習	44 (34/10)	13 (9/4)	7 (3/4)	64 (46/18)
平成25年度 (開始2年目)	野外教育実習	134 (90/44)	16 (5/11)	8 (5/3)	158 (100/58)
	雪上活動実習	69 (38/31)	13 (4/9)	6 (3/3)	88 (45/43)

() は (男/女) の人数を示す、平成26年2月現在

表3 1年間の主な活動の流れ (平成25年度)

主な内容	主な内容
4月	・前期を行うトレーニング内容や日程の検討と役割の決定 (4年生のみ) ・キャンプインストラクター養成講習会 (3年生のみ)
5月	・指導に関する基礎理論 (講義) ・4年生の指導によるインシニアティブゲーム体験 ・インシニアティブゲームの指導トレーニング: 練習
6月	・インシニアティブゲームの指導トレーニング: 実践・評価 ・夏季トレーニングキャンプ: 1泊2日, 江別市森林キャンプ場 ・組織キャンプに関する基礎理論 (講義)
7月	・野外活動におけるファーストエイド・キャンプカウンセリング (講義) ・野外教育実習における役割の決定 (3年生のみ) ・外部の指導者研修への参加 ・教育施設や民間団体が主催する事業での指導実践 (計5泊以上の指導経験)
8月	・教育施設や民間団体が主催する事業での指導実践 (計5泊以上の指導経験) ・野外教育実習に向けた準備・指導トレーニングの実施 ・野外教育実習の実地踏査: 2泊3日, 国立日高青少年自然の家
9月	・野外教育実習に向けた準備・指導トレーニングの実施 ・野外教育実習: 13泊14日 (3泊4日×3回+準備2泊), 国立日高青少年自然の家 ・地域連携事業の実施 (スボルクラブ)
10月	・野外教育実習のふりかえりと評価 ・地域連携事業の実施 (赤平市)
11月	・キャンプディレクター2級 (MD) 養成講習会 (3年生のみ) ・後期を行うトレーニング内容や日程の検討と役割の決定 (4年生のみ) ・雪上活動実習における役割の決定 (3年生のみ) ・地域連携事業の実施 (奈井江町) ・雪上活動に関する勉強会: 準備
12月	・雪上活動に関する勉強会: プレゼンテーション ・雪上活動実習に向けた準備・指導トレーニングの実施 ・雪上活動実習の実地踏査: 2泊3日, 国立大雪青少年交流の家 ・教育施設や民間団体が主催する事業での指導実践
1月	・教育施設や民間団体が主催する事業での指導実践 ・雪上活動実習に向けた準備・指導トレーニングの実施
2月	・冬季トレーニングキャンプ: 2泊3日, 国立日高青少年自然の家 ・地域連携事業の実施 (スボルクラブ, 恵庭市教育委員会) ・雪上活動実習に向けた準備・指導トレーニングの実施 ・雪上活動実習: 4泊5日 (3泊4日+準備1泊), 国立大雪青少年交流の家
3月	・地域連携事業の実施 (奈井江町) ・次年度の年間計画の検討 (3年生のみ)

表2は、養成プログラムを試行した平成23年度からの野外教育実習と雪上活動実習の実習生及びスタッフ数の推移を示している。アウトドア・マネジメントコースが設置されていた頃の野外教育実習の履修生が平均32名（4年間）であったことを踏まえると、専門コースの発展的解消と野外教育科目の一部必修化は野外教育を学ぶ学生の間口を大きく広げる形となったことが分かる。ただ、野外教育実習と雪上活動実習については履修登録者数が年々多くなり、プログラムの運営や安全管理を考慮すると履修者を制限せざるを得ない状況になってきている。そこで、平成24年度の雪上活動実習より実習前に筆記試験を設け、自然体験活動を行うために必要な知識を身につけている学生だけが実習に参加できるようにしている。

2. 自然体験活動指導者に求められる専門的な知識と技術を習得する段階

養成プログラム2年目からは本格的な指導者養成の段階に入り、「自然体験活動の指導に関する専門的な知識・技術の習得と実践」（2年目）や「自然体験活動におけるプログラムの企画や運営に関する専門的な知識・技術の習得と実践」（3年目）を通じて、自然体験活動指導者に求められる専門的な知識と技術を習得する段階としている。1年間の主な活動内容は表3に示したとおりである。

指導者に求められる資質・能力を育成するには、授業

表4 教育施設や民間団体が主催する事業での指導実践（延べ人数）

年度	指導者（3・4年次）		計
	2年目	3年目	
平成23年度	13（4）	0（0）	13（4）
平成24年度	21（9）	9（4）	27（13）
平成25年度	30（1）	3（3）	33（4）

（ ）は5泊以上の長期事業に参加した人数を示す

の時間だけでは限界がある。そのため、2年目からは、授業以外にも、近隣の教育施設や民間団体等の主催事業に指導者として参加し、実際の活動現場で指導力の向上を図る機会を設けたり（表4）、周辺地域の自治体や教育委員会、民間団体と連携し、様々な事業を企画・運営することでプログラムの企画力や運営力を養う機会を設けるなど（表5）、課外活動や自主活動（野外教育研究会）の機会を積極的に取り入れている。このような外部団体と連携して事業を実施する機会を設けることは、養成した指導者が活躍できる場を確保するだけでなく、養成プログラムの成果を地域に還元する機会にもなっている。

養成プログラム2年目以降は、野外教育指導演習を履修した学生が養成対象となる。野外教育指導演習とは、野外教育実習の指導者になってグループカウンセラーやプログラムスタッフ、マネジメントスタッフ（食事・装備・記録）の役割を担いながら組織キャンプの在り方を実践的に学ぶ授業で、①事前講義、②アクティビティ指導トレーニング、③教育施設や民間団体の主催事業での指導実践（OJT）の3つを柱に授業を展開している。

事前講義では、専任教員や非常勤講師がそれぞれの専門性に合わせて、組織キャンプの運営や指導の基礎、指導者としての在り方、キャンプカウンセリング、ファーストエイド等について授業を行っている。

アクティビティ指導トレーニングは、養成プログラム3年目の4年生が中心となって、イニシアティブゲームの指導やテント・タープの設営・撤収、野外炊事（薪割、火起こしを含む）といった野外教育実習の指導で必要になるハードスキルのトレーニングを主に行っている。イニシアティブゲームの指導トレーニング（写真3）は、3年生がIOREシート¹²⁾を使って実際に指導を行い、その様子をビデオで撮影、後で映像を見ながら評価シートに従って自己・相互評価を行っている。3年生の指導に対して4年生が評価・指導を行うだけでなく、ビデオを使って自分たちの指導を客観的に見させることで、初心

表5 地域と連携した事業の実施

年度	月	連携先	内容	場所
平成24年度	10	赤平市	高齢者を対象としたウォークラリー	エルム高原
	2	スポルクラブ	クラブ会員を対象としたスノーシュー	野幌森林公園
	2	恵庭市教育委員会	小学生を対象としたスノーシュー	野幌森林公園
	2	赤平市	高齢者を対象としたスノーシュー	エルム高原
平成25年度	9	スポルクラブ	クラブ会員を対象とした軽登山	藻岩山
	10	赤平市	高齢者を対象としたウォークラリー	エルム高原
	11	奈井江町	高齢者を対象とした室内レクリエーション	交流プラザ
	2	スポルクラブ	クラブ会員を対象としたスノーシュー	野幌森林公園
	2	恵庭市教育委員会	小学生を対象としたスノーシュー	野幌森林公園
	3	奈井江町	高齢者を対象とした室内レクリエーション	公民館



写真3 指導トレーニング



写真4 トレーニングキャンプ

者が陥りやすいルール説明や進行だけといった表面的な指導になっていることに気づかせることができる¹³⁾。また、テント・タープの設営・撤収、野外炊事といった野外生活技術に関しては、近くのキャンプ場を利用して1泊2日のトレーニングキャンプ（写真4）を行ったり、野外教育実習の現地踏査でトレーニングを行っている。

事前講義での学びやアクティビティ指導トレーニングでの経験を指導力の向上につなげるため、近隣の教育施設や民間団体の主催事業に指導者として参加させ、実際の活動現場で指導実践（OJT）を行っている。指導実践は原則5泊以上経験することを条件としている。こうすることで複数の事業に参加する学生が多くなり、多様なキャンプの在り方を学ばせることができる。

このように事前講義や指導トレーニング、指導実践など4ヶ月の養成期間を経た後、野外教育実習に臨むことになる。なお、野外教育指導演習の履修に当たっては、野外教育実習や雪上活動実習、野外レクリエーション指導論等を修得していることが望ましいと条件を付している。野外教育指導演習の履修者数は例年13～16名となっていることから（表2）、野外教育実習を履修した学生の1割強が次のステップに進んでいることになる。

野外教育実習が終わると、次は雪上活動実習の実施に向けて準備やトレーニングが始まる。野外教育指導演習の履修生である3年生にとって、ここからは授業ではなく、野外教育研究会（自主活動）として活動していくことになる。特に9月以降は、実習の準備やトレーニングだけではなく、地域と連携した事業の企画や運営も入るため、週1回程度のペースで勉強会を開き、ミーティングやトレーニング等を行っている（写真5、写真6）。なお、野外教育研究会の活動内容やスケジュールは4年生が中心となって企画し、必要に応じて筆者ら専任教員が助言・指導を行っている。

学生に対する助言・指導で大切にしていることが2つある。ひとつは、3年生への指導は必ず4年生が行うようにしている点である。例えば、3年生の指導等のことで筆者らが気づいたことがあっても基本的には3年生に直接伝えることはしない。気がついたことを4年生に伝え、3年生にどのように指導すれば良いのかを考えさせるようにしている。人に何かを教えようとする時、その何倍もの時間をかけて準備や勉強をしなければならない。そのため、4年生が責任を持って3年生を育成する仕組みを作ることで、4年生が自らの力で成長する機会を設けることができる。さらに、4年生が身に付けた知



写真5 活動の企画と準備



写真6 企画したプログラムのプレゼン

識や技術を3年生に教え伝える機会を設けることで、組織として学びや経験の蓄積ができるようになるからである。ふたつ目は、実習にせよ、地域との連携事業にせよ、プログラムの運営やアクティビティの指導はできるだけ学生が行うことにしている。教員が行う指導をサポートするだけでは実践的な指導力は身につかない。そこで、学生にプログラム運営やアクティビティ指導の責任を負わせることで、事前の準備やトレーニングに緊張感を持たせることができ、さらに活動に必要な指導力を身につけるまでしっかりトレーニングを重ねることができるからである。

IV. 大学のカリキュラムを生かした自然体験活動指導者養成プログラムの評価

1. 効果測定尺度の作成

養成プログラムの研修効果を検証するため、公益社団法人日本キャンプ協会が示すキャンプ指導者に求められる資質・能力¹⁴⁾を参考に、資質(①人格的・性格的な資質、②活動的な資質)、ソフトスキル(③カウンセリングマインド、④集団運営能力、⑤リーダーとしての能力)、ハードスキル(⑥キャンプ生活、⑦アクティビティ指導能力、⑧プログラム企画・運営・管理能力)を表す質問項目を先行研究^{15) 16) 17) 18)}より選定し、69項目の調査票を作成した。質問項目の回答方法は、「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4段階の間隔尺度とした。

2. 効果測定尺度の検討

平成24年度野外教育実習の実習生及び学生スタッフ150名を対象に質問紙調査(有効回答数143件、有効回答率95.3%)を実施し、そこで得られたデータを基に効果測定尺度の検討を行った。

尺度の検討に当たっては、統計処理をするため質問項目の回答を「とてもよくあてはまる」を4点、「少しあてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「まったくあてはまらない」を1点として得点化した。次に、69項目を精選するため、項目の反応分布を確認し、IT相関分析やGP分析を行って基準に該当しない14項目を後の分析から除外した。次に、因子構造の検証を行うため、主因子法・エカマックス直行回転による探索的因子分析を行い、因子負荷量が0.4未満の項目又は複数の因子に0.4以上の負荷量を示す項目を除いて再度同様の因子分析を繰り返し行った。その結果、最終的に20項目が除外され、6因子が抽出された。以上の分析から得られた6因子35項目を「自然体験活動指導者養成プログラム効果測定尺度」とし、

各因子を構成する質問項目を踏まえながらそれぞれの因子名を表6のとおり命名した。

6因子の累積寄与率を算出したところ50.32%となり、養成プログラムの研修効果の5割弱を説明している結果となった。信頼性を確認するためクロンバックの α 係数を算出したところ、 $r=.619\sim .919$ までの値を示した。第5因子、第6因子については若干低い値を示したものの、それ以外の因子では.70以上となっていることからある程度の内的整合性が確認された。また、因子間の相関係数を算出したところ(表7)、すべての因子間に $r=.296\sim .629$ の範囲で1%水準の有意な正の相関が認められたことから、自然体験活動指導者養成プログラム効果測定尺度の各側面は相互的に依存していると考えられる。

3. 養成プログラムの研修効果の検証

養成プログラムの研修効果の検証に当たっては、平成25年度時点で養成プログラム2年目に該当する3年生12名を分析対象とした。研修効果の測定時期は、平成24年度野外教育実習の事前(養成前)と事後(1年目)、平成25年度野外教育実習の事後(2年目)の計3回とした。

研修効果を明らかにするため、下位因子ごとに測定時期で平均(M)及び標準偏差(SD)を算出し、各下位因子の得点を従属変数、測定段階を要因とした一要因分散分析を行った(表8)。その結果、ハードスキル($F(2,22)=118.31$ $p<.001$)、集団運営能力($F(2,22)=16.10$ $p<.001$)、カウンセリングマインド($F(2,22)=7.24$ $p<.01$)、リーダーシップ($F(2,22)=21.25$ $p<.001$)、活動的な資質($F(2,22)=10.69$ $p<.01$)、人格的な資質($F(2,22)=11.28$ $p<.001$)とすべての因子に有意差が見られた。そこで、後の分析として多重比較(Bonferroni・5%水準)を行った結果、ハードスキルは養成前から1年目と2年目、さらに1年目から2年目にかけて有意な得点の向上が見られ、集団運営能力、リーダーシップ、活動的な資質、人格的な資質は養成前から1年目と2年目、カウンセリングマインドは養成前と2年目に有意な得点の向上がみられた。

4. 考察と今後の課題

各下位因子の変容過程は、図2に示したとおりである。本来、養成プログラムは3年かけて行われるが、平成25年度は養成プログラムを開始して2年しか経っていないため3年目のデータが得られていない。そのため、3年間の変容を探る手がかりとして4年生(6名)の2年目、3年目の得点を参考値として掲載した。

養成プログラムの研修効果を検証した結果、「野外炊事における調理器具の取扱や注意事項について説明でき

表6 自然体験活動指導者養成プログラム効果測定尺度

No. 質問項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性	α	
F1 ハードスキル									
67. 野外炊事における調理器具の取扱や注意事項について説明できる。	.744	.076	.064	.157	.106	.180	.631	.919	
68. 登山の指導ができる。	.711	.236	-.053	.267	-.010	.165	.663		
39. キャンプに必要な個人装備について説明できる。	.706	.084	.137	-.010	.273	.217	.647		
55. キャンプで使用する団体装備の準備や補充、管理ができる。	.700	.149	.119	.069	.043	.087	.541		
54. ふりかえりのファシリテーションができる。	.694	.305	.101	.136	.012	.179	.635		
53. 薪割りや火起こしの方法や注意事項について説明できる。	.627	.113	-.059	-.007	.281	.203	.530		
25. 野外活動に適した服装について説明できる。	.611	.166	.210	-.123	.127	.326	.582		
12. テントやタープの設営・撤収の方法や注意事項について説明できる。	.592	.262	-.087	.237	.334	.105	.605		
69. キャンプで予想される危険をたくさんあげることができる。	.571	-.053	.125	-.036	.064	.345	.469		
27. キャンプの目的に応じたプログラムやアクティビティの企画立案ができる。	.538	.306	.295	.209	.154	.114	.551		
13. 体験学習法を理解している。	.531	.065	.114	.165	-.099	.176	.368		
26. アイスブレイキングの指導ができる。	.526	.376	.243	.242	-.001	.032	.537		
14. やけどや切り傷、擦り傷などのケガの処置ができる。	.439	.065	.204	.161	.002	.312	.362		
F2 集団運営能力									
51. 人を引っ張って物事を進めることができる。	-.057	.708	.127	.246	.167	.253	.673	.866	
36. グループのモチベーションを高めることができる。	.128	.557	.361	.187	.292	.068	.583		
66. グループ内の意見をうまくまとめることができる。	.109	.550	.141	.373	.183	.218	.555		
24. グループで問題や課題が生じて解決する方法を提案できる。	.243	.502	.160	.126	.343	.288	.553		
61. 何事にもユーモアを取り入れることができる。	.054	.494	.195	.218	.324	.234	.492		
8. グループの目標を達成するための手段を提案することができる。	.066	.442	.207	.376	.344	.106	.514		
F3 カウンセリングマインド									
48. 人の悩みを受け止めることができる。	.122	.025	.726	.150	.135	.163	.610		.778
62. 人の悩みを解決する方法を一緒に考えることができる。	.063	.181	.632	.124	.148	.246	.534		
17. 相手の年齢や性格に合わせて接することができる。	.050	.110	.552	.097	.269	.024	.402		
16. 好き嫌いなく誰とでも話をするすることができる。	-.107	.166	.520	.200	.301	-.064	.444		
35. いいことをした人に称賛の言葉をかけることができる。	.050	.183	.483	.051	.121	.176	.317		
F4 リーダーシップ									
7. 相手の言いたいことを適切に要約することができる。	.051	.078	.081	.638	.235	-.019	.477	.763	
9. 相手の反応に合わせて分かりやすく説明することができる。	.008	.109	.088	.633	.126	.229	.488		
10. 人の能力を把握して適切な役割を与えることができる。	.068	.373	.060	.484	.176	.162	.439		
3. 仲間から頼りにされることが多い。	.040	.214	.160	.482	.106	.096	.326		
37. 声のトーンを変えるなど話を聞かせる工夫ができる。	.028	.314	.263	.481	.029	.203	.441		
F5 活動的な資質									
47. 既存のことにとらわれず新しいアイデアを出すことができる。	.132	.173	.095	.256	.649	.241	.601	.648	
2. 何事にも積極的に取り組むことができる。	.064	.157	.254	.224	.558	.034	.456		
32. 人が嫌がることでも率先してやることことができる。	-.088	.065	.238	.036	.501	.230	.374		
33. 知らないことや初めてのことで怖じけることなくやることことができる。	-.038	.188	.225	.103	.446	.155	.321		
F6 人格的な資質									
44. 子どもの考え方や感じ方が理解できる。	-.011	.069	.139	.076	.161	.692	.535	.619	
43. 悪いことは悪いとはっきり言うことができる。	.107	.184	-.002	.148	.121	.526	.359		
寄与率	14.85	8.25	7.55	7.25	6.79	5.645			
累積寄与率	14.85	23.09	30.64	37.89	44.68	50.32			

表7 因子間の相関係数

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1 ハードスキル						
F2 集団運営能力	.471**					
F3 カウンセリングマインド	.296**	.531**				
F4 リーダーシップ	.343**	.629**	.394**			
F5 活動的な資質	.306**	.568**	.499**	.436**		
F6 人格的な資質	.338**	.415**	.265**	.334**	.366**	.087

**p<.01

る]、「登山の指導ができる」といった野外活動に係わるハードスキルは経験を積むごとに向上していることが分かり、その他の資質やソフトスキルについても養成前と

比較すると有意な向上が見られた。このことから、本養成プログラムは指導者に求められる資質・能力を向上させる研修効果があるということが明らかとなった。

表8 各下位因子の平均 (M) 及び標準偏差 (SD) と一要因分散分析の結果

下位因子	養成前		1年目		2年目		分散分析 (F)
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	
F1 ハードスキル	2.24	(0.10)	3.21	(0.13)	3.69	(0.06)	118.31***
F2 集団運営能力	2.63	(0.16)	3.18	(0.21)	3.35	(0.13)	16.10***
F3 カウンセリングマインド	3.38	(0.12)	3.70	(0.90)	3.82	(0.06)	7.24**
F4 リーダーシップ	2.63	(0.13)	3.05	(0.16)	3.32	(0.11)	21.25***
F5 活動的な資質	2.88	(0.11)	3.50	(0.11)	3.54	(0.14)	10.69**
F6 人格的な資質	2.63	(0.18)	3.00	(0.19)	3.38	(0.13)	11.28***

p<.01 *p<.001

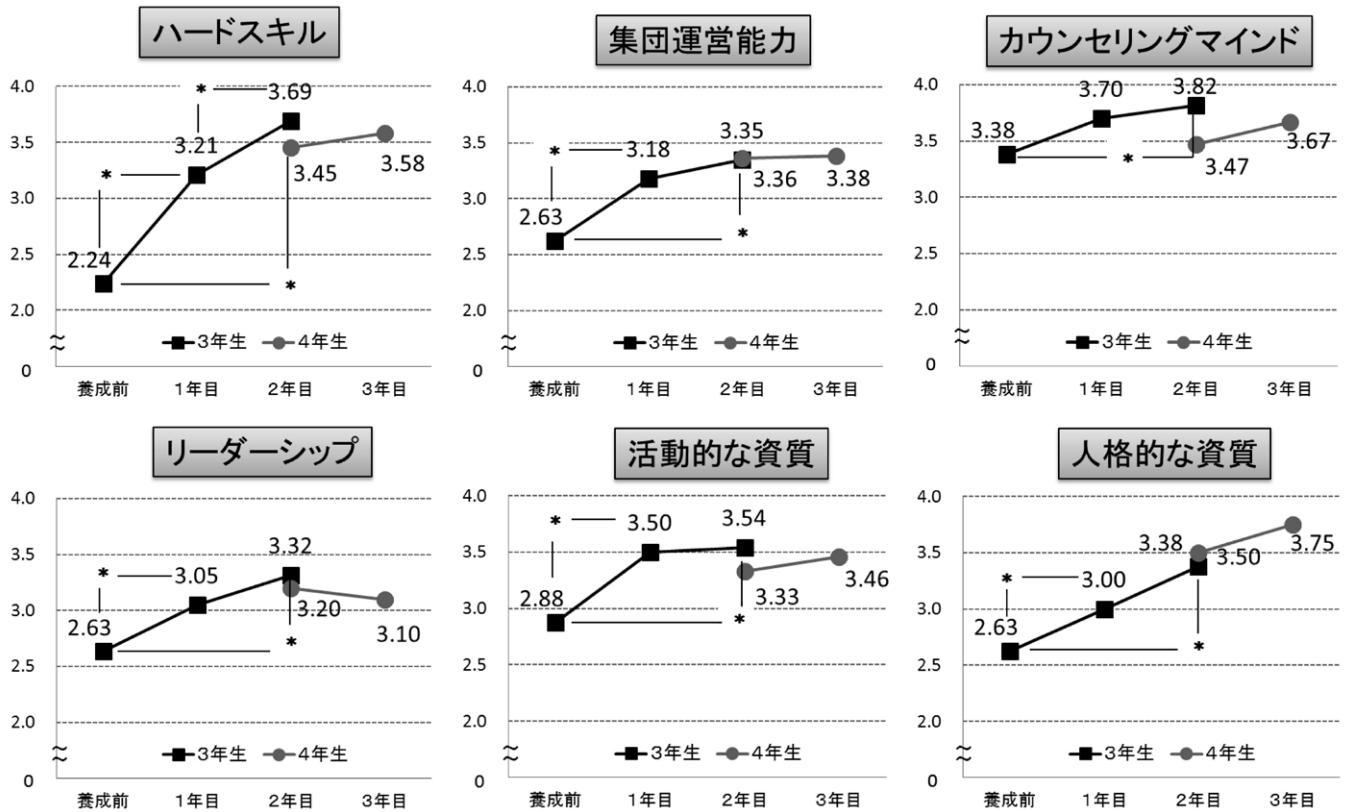


図2 各下位因子の変容過程

そもそもハードスキルは研修やトレーニング (OJT) を通して獲得できる能力と言われており、本研究でも同様の結果が得られたと考える。一方、ソフトスキルについては生来的な資質が影響する能力と言われているが、指導経験によって獲得できる部分が多いとも言われている。そのため、今後、養成プログラムを改善するに当たっては、教育施設や民間団体が主催する事業や地域との連携事業等において指導経験ができる場や機会をさらに増やしていただくだけでなく、ソフトスキルに係わる講義やトレーニング (ロールプレイング等) を積極的に導入することで研修効果の向上に努めていきたいと考えている。

今回作成した効果測定尺度は、あくまで開発した養成プログラムの研修効果を測るものであって、個々の学生の指導力を測り、スキルアップに役立てようというものではない。個々の学生に対して適切な指導を行うために

は、診断的評価の基準を設ける必要がある。現在、インシアティブゲームの指導については既に一定の評価基準を設け、トレーニングに役立てているが¹³⁾、今後は、その他のアクティビティについても指導力が測れる実践的な評価基準を設定し、養成プログラムに取り入れていきたいと考えている。また、プログラムの運営において学生を適切に配置するためのアセスメント評価の基準も検討する必要があるだろう。このように実用性の高い評価基準を設けることで、養成プログラムの研修効果を高めることができると考えている。

V. おわりに

本研究は、大学のカリキュラムを生かした自然体験活動指導者養成プログラムの実践事例を紹介するとともに開発した養成プログラムの評価を行った。その結果、本

養成プログラムは、野外活動に係わるハードスキルをはじめ、自然体験活動指導者に求められる資質・能力の向上に大きな研修効果があることが明らかとなった。

そこで、本研究で得られた成果を基に、今後の大学教育における指導者養成の充実を図る上で参考になると思われるポイントを以下のとおりまとめた。

- ・単に野外教育や体験活動に係わる科目を設置するのではなく、各科目の位置づけを明確にし、体系的、段階的に組み合わせることで研修効果の高い養成プログラムを構築することができる。
- ・野外教育や体験活動に係わる科目を教職課程等で必修化することで、多くの学生に野外教育等に触れる機会を設けることができ、指導者への興味を芽生えさせるきっかけを作ることができる。
- ・青少年教育施設や青少年団体等が主催する事業に指導者として参加させたり、地域と連携して事業を実施することでプログラム運営やアクティビティ指導の機会を設けるなど、近隣の教育資源をうまく活用し、実際の活動現場で学びや経験を生かせる機会を作ることによって実践的な指導力の向上を図ることができる。
- ・自主活動の組織を設け、プログラム運営からアクティビティ指導、後進の育成に至るまで組織の一員として責任を持った行動を求めることで、指導者に求められる意識や態度をはぐくむことができる。特に上級生が下級生を指導し、自分たちが身に付けた知識や技術を教え伝える機会を設けることで組織として学びや経験を蓄積することができ、それが年々受け継がれ、醸成されることでより質の高い指導者を養成することができる。

本研究で得られた成果をまとめると以上のとおりとなる。

今後は、本研究の成果を踏まえ、養成プログラムの見直しや改善を行い、大学教育における指導者養成に資する研修効果の高い養成プログラムを構築していきたいと考えている。いずれにせよ、本養成プログラムは開始から2年しか経っていないため、完成を向かえる次年度も引き続き調査を行い、3年間の研修効果を明らかにしていかなければならない。

付 記

本研究は、平成23年度から平成25年度文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の助成を受けて実施したものである。

文 献

- 1) 中央教育審議会：次代を担う自立した青少年の育成に向けて～青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について～（答申）。文部科学省，2007。
- 2) 中央教育審議会：今後の青少年の体験活動の推進について（答申）。文部科学省，2013。
- 3) 教育職員養成審議会：新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第一次答申）。文部科学省，2007。
- 4) 東京都教育委員会：小学校教諭教職課程カリキュラムについて 解説編。東京都教育委員会，2010。
- 5) 星野敏男：我が国の野外教育振興の課題と青少年教育施設。人文科学論集，45：15-26，1998。
- 6) 自然学校全国調査委員会：第5回 自然学校全国調査2010 調査報告書。公益社団法人日本環境教育フォーラム，2011。
- 7) 文部科学省：平成23年度社会教育調査。文部科学省，2011。
- 8) 粥川道子，青木康太朗：高等教育機関における野外教育の試み（2）。北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要，4：27-36，2013。
- 9) 粥川道子，杉岡品子，青木康太朗：教育養成課程における「野外教育実習」の実践報告。北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要，2：77-90，2011。
- 10) 青木康太朗，粥川道子：キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響。北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報，3：21-28，2012。
- 11) 青木康太朗，粥川道子：自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその効果，キャンプ研究，16：23-29，2013。
- 12) 公益財団法人日本教育科学研究所：アイオレシートについて。http://zaidan-kyoiku.or.jp/iore.html，2013年11月15日参照。
- 13) 北翔大学野外教育研究会：平成23年度野外教育実習実践報告書。pp. 32-24，北翔大学野外教育研究会，2011。
- 14) 社団法人日本キャンプ協会：キャンプディレクター必携キャンプディレクター養成テキスト。pp120-121，社団法人日本キャンプ協会，東京，2010。
- 15) 土方圭，飯田稔：キャンプカウンセラーのソフトスキル評定尺度の開発。野外教育研究，7(2)：23-34，2004。
- 16) 浅井定雄，西川千登世，渋谷昌三：社会人基礎力尺

度の作成の試み. 日本社会心理学会第50回大会抄録,
420-421, 2009.

- 17) 別惣淳二, 長澤憲保, 上西一郎他: 自然体験活動指導に求められる教員の資質能力に関する調査研究. 学校教育研究, 15: 1-12, 2003.
- 18) 国立オリンピック記念青少年総合センター: 事業効果測定のための調査票とその利用法—主催事業評価に関する調査研究報告書—. pp. 46-51, 2001.

